福島県立図書館報

あづま

第61巻（通巻265号）

「20年間残っていた2つの封筒」

参事（兼）社会教育課長　沢　宏一

個人的な思い出で恐縮ですが、私にはこんなエピソードがあります。

今からおよそ２０年前、私は小学校の教師でした。ある時、テレビで「金子みすゞ」の詩集のことを紹介していたのです。金子みすゞという詩人は、私にとってはじめての名前でしたが、テレビの中で紹介されていた「わたしと小鳥とすずと」という詩の朗読に、その時何か胸を突き動かされるような衝動を覚えたのです。その詩が頭から離れなかった私は、近くのＡ図書館にその詩集がないか探しに行きました。しかしいくら探しても本はありませんでした。そこで、紹介していただいた福島にあるＢ図書館に電話をしてみました。（今で言えばレファレンスなのですが）そのＢ図書館にも残念ながら本はありませんでした。しかし、「県外の図書館にあるかもしれませんから照会してみましょうか。」と言う司書の方の声に、「ぜひ」とお願いをしたのです。

それから２週間後、Ｂ図書館の司書の方から再度の電話がありました。「大阪のＣ図書館に本はありました。必要な所があれば、コピーしてお送りしてもらうよう手配いたしますが。」私は、「ああ、図書館ではそんなサービスをしてくれるんだ」と感激しながらその詩のコピーの送付をお願いしました。

そしてそれからおよそ１週間後、金子みすゞの詩のコピーが自宅に届きました。私の手元に残っているこの２通の封筒は、大阪のＣ図書館からＢ図書館に届いた詩のコピーが入っていた封筒と、福島のＢ図書館から私に届いた手紙の入った封筒なのです。

私は、自宅に届いた詩を何度も何度も読んで、担任している子ども達に国語の授業の中で伝えました。あの時、全国を探してくださった司書の方に感謝した思い出の詰まった封筒は、今も大切に取ってあるのです。

あれから２０年。図書館でのレファレンスは、普通のこととなったのかもしません。しかし、「自分が感激したものを子ども達にも伝えたい」という思いが図書館の司書の方の力のお陰で実現したという出来事は、私の「ありがたい思い出」として、２通の封筒とともに消えずに残っています。

さて、今年は国民読書年ということで、県立図書館においても様々な取組みを積極的に行っていただいております。また、県立図書館など文化施設６館が互いに連携・協力しながら「いきいき地域文化活力創出事業」を展開しております。

今、時代が変わり情報通信ツールが氾濫していますが、「図書館が“知”の拠点であることに変わりない」と私は２通の封筒を見ながら強く思っております。